ンターネットが普及した現在，各自がより正確な画像を容易に手に入れられることは訳者の指摘する通りであり，評者としてもこの考えに深く賛同する．

総じて，難解なディオスコリデスのギリシア語原典を一人の手で翻訳した訳者の功績は最大の称賛に値する．これまでディオスコリデスに関心を寄せつつも，ギリシア語に通じない医史学研究者は，もっぱらLily Y. Beckの英訳，あるいはMax Aufmesserの独訳に依拠する他なかったが，これを日本語で参照できるようになったのはこの上ない喜びであろう．研究者必備の一冊であるのは勿論，一般読者にも広く手にしてもらいたい書である．またこのような書を良心的な価格で提供してくれた八坂書房にも一読者として心から感謝申し上げたい．

（福島　正幸）

［八坂書房，〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町1-4-11，TEL. 03（3293）7975，2022年3月，菊判，518頁，7,800円＋税］

適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会 編
『（緒方洪庵全集第五巻）書状（その二）その他文書（附）適塾姓名録』

本書は，大阪大学適塾記念センターの適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会の編集にかかるものであり，大阪大学出版会から発行された．評者の研究経歴は大阪大学とも，適塾記念センターとも，緒方洪庵とも無縁の者であり，評者として不適格の誹りを免れないが，対象となる良書に免じて寛容を請いたい．

本書はこれまで大阪大学関係者によって継続されてきた緒方洪庵研究の決定版と呼ぶべきものと見える．そこで，最初に大阪大学と適塾の関係，および阪大関係者による適塾研究の軌跡について概観しておこう（『よみがえる適塾』『続洪庵・適塾の研究』等参照）．

緒方洪庵（1810～1863）が幕末大坂の過書町（現中央区北浜）に営んだ適塾は，明治以降も基本的に緒方家の手で維持されてきたが，1940年大阪府史蹟指定，1941年国史蹟指定を経て，1942年に大阪帝国大学に譲渡され，戦時下には医学部教官・学生によって使用され，辛くも戦火を免れた．現存唯一の蘭学塾遺構として1964年に国の重要文化財に指定され，1976年から解体修復工事に着工．近年も耐震工事などの補強整備事業が続いているとのことである．

その顕彰活動に関しては，戦後1948年に大阪帝大に法文学部が増設されると，初代国史学講座教授に着任した藤直幹（1903～1965）が1950年代に緒方洪庵と適塾に関する先駆的な研究業績を発表する．同じ頃，適塾出身者を祖父に持つ医学部教授藤野恒三郎（1907～1992，微生物病学）が顕彰活動に意欲を持ち，彼らの牽引によって1952年に適塾記念会が設立され，会誌『適塾』も創刊される（1956～59）．60年代に適塾記念会は一旦途絶したが，藤教授の歿後はその高弟で後継の国史学教授となった梅渓昇（1921～2016）が活動を継承し，また理学部教授芝哲夫（1924～2010）らも加わり1973年に適塾記念会が再開される．

一方，洪庵の直系子孫にあたる緒方富雄（1901～1989）は東京帝大医学部在学中の大正末年から洪庵研究に着手し資料調査を継続していたので，藤野恒三郎・梅渓昇らが働きかけ，緒方富雄・適塾記念会共編による『緒方洪庵のてがみ』全3巻の編纂が始まる．緒方富雄が巻1・2を刊行（1980年，菜根出版）して病没した後，梅渓はこれを継承して巻3（1994年）を完成．更に巻4・5（1996年）まで続刊した．全5巻に収録された洪庵書簡は252通を数える．梅渓は『緒方洪庵のてがみ』全5巻完成後，2002年の適塾記念会創立50周年を機に，藤野恒三郎以来の同会の宿願である『緒方洪庵全集』の編纂を提起した．

本書巻頭の「『緒方洪庵全集』の刊行計画について」（島田昌一編集委員長・村田路人編集長）によれば，刊行計画が本格化して適塾記念会緒方洪庵

全集編集委員会が発足したのは2007年のことであり，全5巻の計画で着手．第1・第2巻には洪庵の主著『扶氏経験遺訓』を収録し（2010年刊），その他の洪庵著作を収める予定の第3巻（分量の大幅増により上中下3分冊となる予定）は，膨大な写本資料を比較検討が必要になることからこれを後回しとし，第4巻に洪庵日記（「癸丑年中日次之記」「壬戌旅行日記」「勤仕向日記」）と宛名別の書簡中最も数量の多い箕作秋坪宛書簡69通（日本学士院所蔵）のみを収録し2016年に刊行された．更に2020年4月からは編纂委員会を再編強化して，その新体制の下で第5巻として刊行されたのが本巻である．

本巻の内容について概観しておこう．「書状（その二）その他文書」というタイトルは，一見残り物の寄せ集めを思わせ食指が動きにくいかも知れないが，決してそうではない．本巻のタイトルにある「書状（その二）」とは，現在までその内容が確認できた緒方洪庵書簡のうち，上述の第4巻に収録した箕作秋坪宛書簡を除くものを指している．書簡本編の末尾に置かれた，尾崎真理氏の「【全体解説1】緒方洪庵書状について」（p430～439）に従えば，その書簡の内訳は宛先の人物にして87人，計240通を数え，第4巻と合わせると309通となり，『緒方洪庵のてがみ』全5巻に未収録の書簡は約60通となる．藤野恒三郎・梅渓昇以来の悲願である『緒方洪庵全集』のうち，難関と言われてきた書簡集がここに完結したことになる．今回釈文を作成するに当たり，可能な限り原物に当たって釈文を見直し，『緒方洪庵のてがみ』の不十分な点（封筒・端裏書・尚々書・抹消箇所の欠落など）が補訂されている．書簡ごとに典拠が明記され，中には現存不明のため緒方富雄らの先行研究の中で引用された一部分のみを掲載している場合もあり，徹底した収録ぶりが見て取れる．

髙浦佳代子氏の「【全体解説2】緒方洪庵の書状中の薬名について」（p440～446）も洪庵書簡中に見える蘭薬表記（一字薬名など）について言及されていて興味深い．

次いで，「その他文書」として，「A. 洪庵・適塾関係文書」「B. 除痘館関係文書」（p449～500），附録として適塾の門人録である「適塾姓名録」（p533～602）を収録している．尾崎真理氏による「【解説】洪庵・適塾関係文書および除痘館関係文書について」（p501～529）は，既紹介史料が多いとは言うものの，「大阪市種痘歴史」（『論集日本の洋学』所収）等を参照した解説が有益．なお，尾崎氏が疑問を残している「2過書町転居諸入用扣」（1845年）に捺された蔵書印「桂仙堂文庫」は京都市西京区桂に住んでいた杉立義一所用のものである．「適塾姓名録」に対しても，二宮美鈴氏の解説が備わる．

本書の中心をなす書簡について更に紹介しておこう．書簡は宛先の人物ごとにまとめて姓名の五十音順に配列されている．一通ごとに注が施され，宛先人物ごとにその人物や書簡の内容に関する解説がなされていて，行き届いた内容になっている．本巻の編集責任者である村田路人・尾崎真理両氏のほか，宛先の87人を以下の通り分担執筆しており，各執者が担当した宛先は次の通りである．

村田路人氏14人（青木周弼，青木研蔵，伊藤慎蔵，藤井高雅，大村益次郎，緒方郁蔵，小山田主鈴，小山田大輔，後藤浩軒，頓宮篤弼，西有圭，萩原広道，布野雲平，山崎僊司）

尾崎真理氏18人（池上謙策，伊藤圭介，緒方八重，緒方惟準，緒方惟孝，緒方拙斎，億川翁介，金森建策，佐伯きやう，佐伯瀬左衛門，佐伯右馬之介，坪井信良，戸塚静海，濱口梧陵，広瀬元恭，深沢雄甫，堀家きち，堀内忠亮）．

東野将伸氏23人（秋山弥左衛門，有馬辰三郎，石井宗謙，石坂堅壮，伊東南洋，宇田川興斎，林孚一，大森武介，河田雄禎，佐野周研，津下成斎，富沢松庵，中尾沢右衛門，中村恭安，久岡喜源太，久岡東作，藤田彦左衛門，守屋庸庵，山田元珉，山田貞順，山成大年，山成直蔵，山鳴剛三）．

橋本孝成氏19人（有吉文郁，安藤駿蔵，池田良輔，大浦玄尚，太田精一，川本泰然，小石元瑞，小石中蔵，篠田正貞，武谷椋亭，塚本道甫，中島広足，長与道全，長与専斎，平瀬後室，船曳卓介，森鼻純三郎，安田謙曹，吉田有秋）．

上田長生氏8人（内山七郎右衛門，内山隆佐，

大田良策，笠原良策，笠原健蔵，黒川良安，八田道碩，藤野昇八郎）．

福田舞子氏3人（梅谷左門，村上代三郎，渡辺卯三郎）．

糸川風太氏1人（池田多仲）．

平田良行氏1人（江馬信成）．

巻頭の青木周弼宛書簡について2020年にインターネットオークションで落札した史料であるとあるのが目を惹く．古書店から購入した頓宮篤弼宛書簡，古本市目録の掲載写真による山田元珉宛書簡など，適塾記念センターにおいて精力的に資料収集が継続されていることもよく分かる．個人蔵の史料も少なからず収録されていて（例えば筆者の知人秋場仁氏所蔵の新出資料など），長年の資料発掘の成果であることが窺える．適塾門人に関する情報としては，芝哲夫「適塾門下生に関する調査報告」がしばしば引用されており，芝哲夫の貢献も少なくないことが知られる．

今更言うまでもなく，緒方洪庵は備中足守藩（現岡山市北部）の藩士佐伯家に生まれており，交流圏には全国各地の洋学者の他に，郷里備中の人々が少なくない．岡山関係人物が主に東野将伸氏によってよく紹介されている．

以上，繙閲したままに概要を記してみたが，書簡の内容について味読しうる読者が本会会員中に数多く存在するはずであるので，ぜひ多くの方々に一読をお薦めする．残る第三巻の完結を期待する会員諸氏も少なくないはずである．

（町　泉寿郎）

［大阪大学出版会，〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-7 大阪大学ウエストフロント，TEL. 06（6877）1614，2022年3月，A5判，636頁，13,000円＋税］

町泉寿郎 著
『前近代の医家たちとその学び――日本近世医学史論考 I ――』
『幕府医学館と考証医学――日本近世医学史論考 II ――』

標記の2冊は，各冊800頁近く，計1500頁をゆうに越える大著である．頁数も多いが，内容も濃厚で，目次を写すだけでも与えられた紙面を超過するほどであり，書評を書くには難儀な大作である．

本書は書名の示す通り，著者が長年にわたり著述した医学史に関する論考を集成したものである．著者の町氏は二松学舎大学の出身．私事になるが，大学院博士課程に在籍中，評者は著者と知り合い，ともに江戸時代の医者の漢文墓碑（藤浪剛一収集資料）について読書会を始めた．著者が幕府医学館に興味を示して博士論文に取り組み，これが縁となって著者は北里研究所東洋医学総合研究所に就職することとなった．著者は6年半研究員として在籍し数多くの医史学関係論文を執筆し発表された．本書に収録された論文にはその時期のものも少なからず含まれるであろう．その後も今日に至るまで医史学関係の研究は進められ，本書の編纂へとつながったのである．

本書2冊は目次によると，各冊それぞれ総論と各論に分けられ，第1冊の総論は章と節，各論は部と章と節，第2冊の総論は節のみ，各論は章と節から成り，構成はいささか複雑である．

第1冊の「前近代の医家たちとその学び」の総論は3章から成り，第1章は「中国医学とその日本への伝播」．短文ではあるが，これだけでも中国伝統医学の特徴を知ることができる．第2章は「近世日本の医学にみる『学び』の展開」．第3章は「徳川幕府医官制度からみた近世日本の医学・本草学」．著者ならではの豊富な知識が集約されている．

各論は4部から構成される．第1部は「曲直瀬流医学と近世日本医学の形成」．著者には別に『曲直瀬道三と近世日本医療社会』（杏雨書屋・2015）